



布を巡る旅

第2回

～ベトナム～ 北部少数民族の布仕事

後藤ふたば

花モン族、色の洪水くカンカウ

ベトナム最北部に位置するカンカウという村では、毎週土曜日にマーケットが開かれ、会場の山裾は周辺から集まる花モン族によって埋め尽くされる。2009年春、中国側からラオカイに入つてこの村を訪ねた。

早朝のバスで村を目指していると、直前までまったく何の気配もなく、本当にこの先で市が立つのか不安になるほどだったのに、小さな丘を越えた途端、眼前に掘立小屋がひしめく大きな市場が現れ、やがてバスはピンクと青を基調とした民族衣装の洪水に飲み込まれた。見渡す限りすべての女たちが民族衣装を身に付けている。圧倒的な光景である。

彼女たちの衣装はとにかく華やかで重厚だ。モン族は刺繍の民だが、ここの花モンはそれだけではなく、布を少しずつ見せながら幾重にも重ねたり、飾り布を付けたリ、色糸を刺したりして衣服を作る。当然服はどんどん厚く重く、まるで鎧のように固くなつたりもするが、彼女たちは気にしない。むしろその張りが大事なかもしれない。

よく見ると、チロリアンテープや山道など、日本でもおなじみの手芸素材がたくさん縫い込められている。かつてはこういう部分も刺繍で模様を作っていたのだろうが、新しもの好きな気風もあるのか、取り入れて自分たちのものになっている。カンカウの市にもチロリアンテープ屋が何軒もあり、どこも大にぎわい。

どんなに衣服が厚く重くならうとも、美しいものは縫い込めずにはいられない、それが花モン族のDNA。時代とともに変化、いやもしかしたら進化させながら、彼女たちはまだ自分、その衣装を身に着け続けるに違いない。

流れに楫さず赤ザオ族くサバ

カンカウから国境の街ラオカイを挟んだ反対側には、少数民族の町として名高いサバがある。サバにはさまざまな民族がいるが、布仕事で圧巻なのは赤ザオ族だ。花モン族のような派手さはなく、男女とも濃紺のズボンスタイルなのだが、そのあちこちに施された刺繍のみごときには息を呑む。

木綿地に細い絹糸で刺される刺繍は、

森や田んぼ、赤子、精霊などを描いているのだという。紺地によく合う渋い色目が好まれるようで、花モン族の華やかさとは好対照だ。それにしても、なんという細かき、そして正確だろうか。小豆粒ほどの大きさの紋様を、繰り返して繰り返して何十個も何段も。よほど真面目で根気強い性格の民族なのだと思う。

サバの市場にも、中国製の濃紺の生地が山積みされていた。かつては周辺に暮らす黒モン族が手織り藍染めした生地を使っていただろうけれど、新しい服は中国製の生地で作られることが多いようだ。それでも彼女たちは、こと刺繍に関しては、易きに流れるつもりはないらしい。国境を挟んで数十キロの中国側の同じ民族は、既に蛍光色の太い毛糸を使った粗雑な刺繍に馴染んでいるというのに、こちら側のザオたちは、かたくなに昔通りの作法を守っている。実に不思議だ。変わつてゆくものがあり、敢えて変わらうとしないものもある。それが彼らに何をもたらすか、彼らにも、そして誰にもわからないのだが。

ことう・ふたば ● 東京生まれ、元・辺境旅系ライター。軽井沢の浅間山麓に住み、現在はデザイン・縫製を主な生業としている。布集めの旅は今も変わらず、どこへでもザックを担いで行く。布服屋リンコル店主。



刺し目の方向や大きさを揃えることさえ我々には至難の業なのに、赤ザオ族の女性たちはやすやすとこの細かな刺繍をしてのける。多くの日本人が実物を見て「機械でしょ？」と聞くのも無理はない。これが人の手によるものとは、にわかには信じがたい。人の手は、こんなこともできるんだと、つくづく思う。できることなら、次の世代にも伝えることを願うばかりだ。

ベトナム
中国
ラオス
★カンカウ
●ラオカイ
★サバ
●ハノイ

以下は地図のトリミング次第で
タイ
●ホーチミン



- ①市を楽しむ花モン族の女性たち。この姿でバイクにも乗る
- ②赤ザオ族の衣装は濃紺ベース、みごとに刺繍が施されている
- ③カンカウは中国への出入国施設のあるラオカイからバスで約4時間

②